
元人間。元神。今？

ある日のあひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元人間。元神。今？

【Nコード】

N0931Z

【作者名】

ある日のおひる

【あらすじ】

ある日、高校生の人璃心軌は、ついていた。ラッキーだった。だが下校途中に現れた、怪しげな男に君は、もうすぐ死んでしまうと言われる。それは、余りに、理不尽な、必然だった。

一神話 前書き

俺、元、人間。

元、神。

今、？

これが、僕、人^{ひとり}璃^{しん}心^き軌。

現在、？ と言う事になるだろう。？。はてな。クエスチョン。
意味不明。理解不可。不可解。摩訶不思議。僕だつてそうだ。どう
やら、今の僕は、人間では、無いらしい。いや、人間だったが正しいか。まあ、人間で無い事に変わりは、無い。

僕は、人間から、神になり。神から？になった。はてなと言うのは、名が無いからだ。いや、本当は、世界中血眼になって探せば、見つかるかもしれないが、そこまでする気には、ならない。

名。元、人璃心軌。今でも、それを名乗っていいのかは、分からない。これは人間だった頃の名のだから。でも、使わせて貰っている。別にこの名前が気にいっていた訳じゃないが、この名前を使つて、16年。今から、新たに付けるのもアレだから……

そう、僕は、一カ月前まで、人間だった。それが、一生続くものだと思っていた。

だが、運命の悪戯か。偶然か。必然か。奇跡か。分からないが、僕の意味とは、関係無く、僕は『神』になった。

二神話 ついでに

高校に入って二回目の春と夏の間。その日は、春と言うには、暑く。夏と言うには涼しいそんな日だ。五月中旬の事。学校帰り。下校途中。僕は独り。

今は、学校近くにある書店で立ち読みをしている、漫画、小説、ライトノベル。サブカルチャー。本は好きだ。買うつもりの無い立ち読み。店員には、申し訳ないが、たまに買うので、今日のところは見逃して欲しい。などと、自分勝手の言い訳をし、手ぶらで書店を後にする。いや、手ぶらでは無かった。学校の鞆と、『傘』それが僕の手には握られている。

書店を出ると、辺りは、暗くなり始め、僕の視野に入る人々は、小走りで走る人が多い――雨が降っている。今日の朝見た、テレビの天気予報の降水確率は、0%。それで傘を持っていない人も多いのだ。でも、何故か、僕は、『傘』を持っていた。ラッキーだ。付いている。なんとなく、意識をしないで。無意識で。何故か今日、家から持ってきた、『傘』。ソレを差し、僕は、近くのバス停へ向かう。普段は、自転車で登下校をしているが、今日は、『たまたま』バスで登下校だ。理由は、得に無い。ただなんとなく。そう、ただそれだけ。

バスに乗り、家の近くのバス停まで向かう。雨が降り出した事もあり、人がいつもよりも多く乗っていたが、運よく僕は、開いている席に、座る事が出来た。

今日は、妙についている、朝、天気予報の次にやっていた正座占いが12位だったがやっぱり関係の無いことだ。僕は、占いなど信じてはいない。あんなモノを放送するんだったら、他に放送しなければいけない事が在るのではないだろうか、国によっては、本気で

占いを信じている人が多く居る国が存在すると聞くが、全く、どうかしているんじゃないかと僕は、思う。

そんな事を考えながら、バスに揺られること、15分くらいだろうか、一番家に近い、バス停で僕は降りた。

此処で降りたのは、僕独りだけ、辺りは、もうかなり暗い。僕の家までの道は、余り人通りが多いとは、言えない。家もそれ程多くは無い。まあ、手っ取り早く言うと薄気味悪い道だ。一定の距離ごとに在る、電柱。その上には、今にも消えかけそうな、ライトが付いて、弱い光で暗い道を照らしている。その光に群がる、虫達もこの気味悪さに一役買っているだろう。

だが、僕にとっては、何でも無い通いなれた道だ。恐怖など無い。子供じゃあるまいし、ましてや、僕は、幽霊や、魂なんて、非科学的な物を信じてなどいないのだから。

傘を差し、歩く僕。勿論足音は、僕独りだけ。他の音といったら、雨音ただそれだけ。ここまで別に何も変では無かった。よく在る日常の風景。

だが、いつもと違う事が一つある。いや、見つけた。違うと言うより、変だ。電柱の下に誰かが立っている。いや、ただ立っているなら、何も変では無いだろうが、明らかにコイツは、変だ。

電柱の上に在るおぼろげなライトの光に照らされているその『男』の外見は、Gパンに、サンダル、半袖Tシャツ。そして、腰くらいにまで伸びている長い長髪、色は、恐らく染めていない黒、髪を頭の後ろで、男に対して余り使いたくは無いが、ポニーテールにしているらしい。歳は、分らないが、若そうだ。若いと言っても、20代中盤くらいだろうか？確かに、外見からして、余り普通とは、言えそうにないが、そんな事よりも、一番気になったのは、この雨の中、傘を差していない状態で、そこに平然の立ち、僕の事をじっと見ている事だった。

三神話 嫌々傘

僕は、立ち止まった。男との距離約、十メートル。

傘を差す俺。傘を差さずまるで雨をシャワーのように浴びて、僕を見つめる男。うつすら笑っているようにも見てとれる。

なんだ、コイツは！？ 明らかに異常だ。だが、僕の家はコイツの先だ、だから僕は、止まってしまった足を一步踏み出す。

動き出す僕。静止している男。視線が気になるが、構わず僕は歩いたが、踏み出して5歩のこと、

「雨が降っているね」

男がいきなり、言葉を放つ。いや、この場には、僕とコイツしか居ない、だとすると、コイツは僕に話しかけたのだ。いきなり——確かに、僕が話しかけられる事を予想していなかったからいきなりになるだろうが、その口調は、まるで、お隣さんの世間話、そんな感じだった。

続けて男は、

「君の傘に入れて貰えるかな」

と、言って、俺の元へと、今まで動かなかった体を、動かす。

俺には、こんな奴、男と、相合傘などする趣味など無い。勿論御免だ。それに、それだけで濡れなら入る必要もないだろ。はつきり言って不快だ。その表情は、僕の顔に出ているだろう。この不可解な状態で全くもって冷静で居られる程、僕は人間が出来ていないつもりだ。これから先、出来上がる事も無いだろう。

そんな僕の事をお構いなしに、男は、僕に近づき頭をかがめ、僕の傘へと入って来る。

「よつと」

「えっ」

驚きの7割、呆れが3割と言ったところか、僕は、声を漏らす。

僕の返答を聞きもせず、傘に入つて来た男。今まで、これ程図々しい奴が、俺の人生の中に居ただろうか？

そして、俺の表情を窺うように、顔を見る男。そんな顔を見たくも無いので、下に視線を逸らすと、首には、十字架のネックレス。右手には、数珠のアクセサリーがしてある事に気付いた。全く、西洋が好きなのか、東洋が好きなのか、少し疑問に思いはしたが、今の若者は、そんな関係無いかと、自分と方がどう見ても若いがそんな事を思った。

「やっぱり、君か——どうだい、ついてるかい？」

何の脈絡の無い文。意味が分からない。

「そう、困惑しないでくれよ、君は、ついてる筈だよ」

気味が悪い、知らない男にいきなり、自分の傘に入られ、顔を近づけられれば、9割9分7厘位の人は、そう思うだろう。気味が悪いとは思わなくとも、それに近い感情は抱く筈だ。ここであえて、三厘残したのは、普通じゃない奴も世の中には居るからだ、コイツのように。

「すみません、急ぐので」

そう言つて、男から離れて、少し数歩、歩いたところで男が、

「あらら、いいのかい、君——死んじゃうよ」

さっきまでの声とはまるで違う、それは僕を憐れむような、そんな声だった。

四神話 蹴り

「死ぬ？」

僕は、不本意だったが、立ち止まり、聞き返した。雨の音が煩かったが、確かにコイツは、僕が死ぬと言った。

男は、

「いや、ゴメン、間違えたよ、『死んじゃう』じゃ無くて、『消えちゃう』が正しかったよ」

その言葉に、「ゴメン」の誠意など一切感じられない。

「馬鹿らしい、貴方に何が分かるんですか？ 僕は帰りますよ」

立ち去ろうとしたが、男は、それを止めるかのように、

「すまないね、気を悪くしたかな？ おじさんは、口が悪くてね、でも良いのかい帰っても？」

言葉は、冗談のように聞こえるが、何故か、説得力のある声。僕の知らない事を知っているようなそんな声だ。

何故か、僕は、立ち止まり、男の方を振り向いた。そうしたかつ

た訳じゃないが、そうした方が良いとまるで体が言っているようだ。

「話を聞いてくれる気になったのかい？ その判断は、正しい。さすがだね、君は、ついているよ」

「少しだけ、聞きます。僕が『死ぬ』ってどういう意味ですか？」

「死ぬんじゃない、消えるんだ。君は、幸か不幸か、『ソレ』に当たってしまったんだよ」

全く理解に苦しむな、コイツと話していると。消えるんだったら不幸に決まっているじゃないか。

「まあ、信じられないだろうね、信じたくもないだろう？」

そりゃそうだ、初対面に遭った奴に、貴方は消えます、なんて言われて、信じる奴なんて、頭のネジどころか、頭の回路ごと、いか

れているとしか、考えられない。

「うーん、そうだな。君にこの話を聞いてもらうには、まず君の今の状況を知って貰うのが良いだろう。うん。そうしよう」

そう言い終わった瞬間、男が、消えた。いや、違う、消えたんじゃない、移動したのだ、僕のすぐ横に、

「えっ!？」

気付いた時には、僕の左に男が居た。居るんじゃない、構えている、何を？ 脚をだ。速い。普通の人間のスピードでは無い事ぐらいは、理解出来た。

男が、僕の左脇腹に向かって、物凄い蹴りを繰り出そうとしている。その風圧で雨は、今その足から、逃げている。避けている。まるで、雨さえもその蹴りを恐れるかのように。

僕は、動いていない。いや体が反応出来ない。それ程男は、速い。脚が脇腹へと

迫る。襲いかかる——だが、脇腹に当たると思った脚は、僕の体には当たらなかった。いや触れられなかった？ 脚は、僕の体に当たる瞬間、一瞬のこと、静止したかのように見えた、いや、まるで、見えない壁にぶつかったかのように。

男は、脚を上げた状態で静止している。右脚のGパン脛の所にさつきまで無かった、穴が開いている。

「やっぱり、こんな蹴りじゃ、傷一つ付かないか、流石だね」

笑う男。嬉しそうに。

五神話 五月

「そう、驚くんじゃないよ、おじさんは、蹴っただけだ」

いや、いきなり、初対面の奴に蹴られると言うのは、普通は、驚くべきことだろう。だが、今は、ツツコミどころが多すぎる。確かに驚くと言ふよりは、驚愕のほうが、この状況には、ふさわしいだろう。

そして、男は、上げたままだった脚を降ろし、

「今、驚くべき事は、今の蹴りから、君を護ったのは何なのか、そう思わないかい？」

確かに、僕は、何かに護られたかのように、コイツの蹴りが止まった。コイツの話しからすると、普通の人間じゃないスピード動くコイツの事より、コイツの蹴りを止めた何かの方が重要らしい。

「どうだい、おじさんの話を聞く気になったかな？」

「その話しが、僕が消える事と関係があるんですね？」

コイツは、信じる訳じゃないが、聞く価値は、あるのではないかと僕は、判断した。

「モチロン」

男は、笑う。不敵な笑みだ。

「じゃあ、こんな天気で、外で立ち話もなんだから、おじさんの家へおいで」

そして、僕は、コイツの家へ案内された、筈だったが、十数分後着いた先は、もう、随分前に廃れたであろう、神社だった。鳥居の前に在る、二匹の狛犬のうち片方には、頭が無い。鳥居をぬけて本殿へ続くであろう石畳の上？ 恐らく上だが草で石畳が見えない程伸びきっている。そして、ボロボロの本殿。

「いやーこの町に来て、住む所をどうしようと思っていたが、中々

良い物件が見つかったよ」

まさか、思ったが、まあこの男ならあり得るかと思得をした。

「まあ、汚い所ですが、どうぞ」

中へと案内される。一応、

「邪魔します」

中は、電球が一個付いてあり、床には、寝袋、ガスコンロとその上に置いてあるやかん、近くには、カップ麺が数個置かれている。そして、ロープを張って作った、物干し竿？ には、ハンガーに掛った数種類の衣類。どうやら、コイツは、本当に此処に住んでいるらしい。

「まあ、適当に座って、くつろいでよ、おじさんは、ちょっと着替えるからね」

僕は、床であぐらをかく。どうやら、一応掃除は、したらしい、ところどころ、穴は開いてはいるが、埃は、付いていない。

「いやーお待たせ」

着替えを済んだ男が、僕の目の前へと座る。またGパンに半袖のTシャツ。

「さてさて、何処から話そうかな」

もったいつけるように、男は、言う。

「そうだね、まずは、自己紹介から始めようか、おじさんの名前は、木〇拓也そうだね、略して、キムタクとでも、呼んでくれても良いよ」

確信。絶対偽名だ。

「おや、気にいらなかったかい、じゃあ、香〇慎吾の方が良かったかい、じゃあ、略して、慎吾ママとでも呼んでくれ」

どこが略されている！？ しかもそのネタは、今の高校生には、恐らく通じる奴は、そうは、居ないぞ。

「他にも、稲〇五郎、イワコデジマ。中〇正広、ブラックバラエティ。どれでも、好きなモノで呼んでくれたまえ。ズバリ、おススメは、やっぱり、キムタクかな」

おいしい！ 一人たらないぞ！ ここまで言っただ、草〇剛さんも入れてやれよ！ 五人揃ったの、S U O P だろ！

「ちなみに、誤解しないで欲しいのは、おじさんは、邪式延厨（ジヤニ〇ズ）は、好きじゃないからね」

思いつきり、悪意の籠ってる、当て字だ。文字の中に厨二を入れてやがる。相当だ。

僕は、呆れ気味に、苛立ち気味に、

「真面目に言ってくれないのなら、帰りますよ」

「いやゝごめんね、昔、家を出る時に、その時まで使っていた名を捨てて来たんだよ、それでね、そのまま良い名が付かず、適当に偽名使っていたんだけど、君には、失礼か。じゃあ、今付けよう、今なら、なんとなく、良い名が付けれそうだ。そうだなあゝ、雨、五月、神社、ガスコンロ、カップ麺……」

コイツ、本当に、名前を考えているのか？

「五月…… サツキ。 サツキ。 うん。 サツキで行こう。 どうか、え」と

「人璃 ひとり 心軌 しんき です」

「人璃君ね、中々変わった名前をしているね」

今、名前を決めた奴には、言われたくは無い。

「サツキ、良い名とは、思わないかい？ 五は、五体満足、体を意

味し、月は、闇を照らす光。つまり、この体で、闇を照らすと言

う意味が込められている。我ながら、中々の出来だ」

腕を組み自画自賛する男いや、サツキ。確かに、今付けた割に、

意味まで込めるとは、口が達者と言っかなんと言っか、まあ、キム

タクよりは、マシだ。

六神話 サツキ

「それじゃあ、改めてまして、サツキだ、よわい年齢は、26。君は、見たところ、高校生かな？」

制服姿の僕を見て、言う、サツキ。そりゃそうだ、高校生じゃ無いのに、高校の制服を着ている奴なんて、まず、居ないだろう。

「ええ、高2年です。それより、サツキさん——」

サツキは、手を広げ、僕の顔の前に突き出す。

「人璃君。おじさんを目上の人と見て、さんを付けてくれたのは、いいけど、君から『さん』を付けて貰うのは、少々気が退けるな。くだけで、サツキで構わないよ」

「えつと、それじゃあ、サツキ。そろそろ、教えてくれないか、さっきの事と、僕が——」

「消える事かい？」

僕のセリフを奪うサツキ。見透かされているのか。

僕は、黙って、頷く。

それを見たサツキは、立ち上がり、一度後ろを向き、そして、振り向き、

「いいよ、教えてあげよう、君が、それを望むならね」

嗤っているように見えた。

「少し、長くなるけど良いかな？」

ここまで、連れてきといて、今更、時間など気にはしない。

「ええ」

「そうかい、じゃあ、始めるとしようか。まず君は、神様を信じるかい？」

唐突な質問だが、僕の答えは、とうの昔に出ている。

「いや、信じてない」

続けて、サツキは、

「じゃあ、幽霊は？ 魂は？」

「そんなモノある筈が無い」

「はは、ある筈が無いね、人璃君。君は、随分自分勝手な言葉を使
うね」

笑っている、サツキ。見下している。サツキ。

「完璧だね、思った通りだ。いや、そうでないと、おかしいね。必
然とも言っべきかな」

「一体、アンタは、何が言いたいんだ」

「その、君の、確固たる意志が、君を消すのさ」

七神話 信仰

「消す？」

「ああ、君は、神様を信じていないんだろ、つまり、君は、無神論者。そう言う事になるのかな？」

「まあ、そう言う事になる」

確かに、僕は、初詣にも行ったこともあるし、仏壇に手を重ねた事もある。だか、それは、ただの行為でしか無く、何も、神や仏を信じている訳じゃない。

そう、成り行き。みんながするから、仕方なく、自分もする。ただの行為に過ぎない。何もそんなのは、僕だけじゃなく、日本全国に大勢でも居るであろう中の一人だ。

「随分、冷静に聞いているね」

まるで、もつと。他の言葉を言われると置いていたのだろうが、自分が消えると言われる話は、僕は、半分以下程度にしか聞いていない。

「ここからの話しは、今の君の固い頭じゃ理解出来ないかもしれないけど、聞いてくれるかい？」

「ああ」

「そうかい——神様の言うモノはね、信仰で生まれるモノも多いんだよ、人々の思い、想いが重なり、重くなり、神が生まれる事もある。まあ、神様にも、色々種類があるから、一概にそうとは言えないんだけどね。宗教が出来てから生まれた神様つてのも、多いんだよ、そう言う場合は、宗教が神様を生んだとも言えるかな」

「そして、これからが君の問題に入る訳だ。普通の宗教なら問題は無かったんだ、でも、『コレ』という、特別かつ異質な『モノ』だから、問題が発生したと言っている。現代は神を信じ無いモノが多くなったそうだと君のように」

確かにそうだ、僕の知る限り本気で神を信じている奴は居やしない。

「神を信じ無い者。その人達が多くなり、新しい信仰が生まれたと言っている。『神は居ないと信じる信仰』、その思い、想いは、重なり、重くなり、大きくなり、強くなり。その強い信仰から、神様が生まれてしまった」

「はあ？ 百歩譲って、神が居たとして、何で、神が居ない想いから、神が生まれるんだよ」

さつき、サツキが言ったように僕には、理解出来ない。

「だから、さつき言ったろ、神様は、信仰で生まれる、神様が居ないと信じる強い想いが、神様を生んでしまう。矛盾のように聞こえるが、人間の意志は、それ程に力を持っているんだよ」

「いや、この場合は、『神にさせてしまった』と言うのが正しいかな。人璃君、人間から、神になった人を知っているかい？」

それくらいは、知っている。信じては無いが、

「イエス・キリストだろ」

「その通り、つまり。人間も神様になれるのさ、無から神が生まれる事もあれば、人、もしくは、動物、物だってあり得る」

「幸か不幸かを決めるのは、君次第だが、この『神が居ないと信じる信仰』は、人を選んだ。モチロン、同じ考えを持つ者を選び、たまたまか、偶然か、はたまた、奇跡か、必然か、運命神の悪戯か、それは、分からないが、御神体として、とある高校生を選んでしまった訳だ」

ここで、ようやく僕は、コイツの言いたい事を二割程度は、理解したと思う。

「それって……」

「そう、君は、神様になったのさ」

八神話 日本刀

「そう、君は、神様になったのさ」

サツキは、そう言った。僕の予想通りの答えだったが、理解出来ない。難題難問。意味不明。日本語の意味さえ疑った。

「はは、信じられないというか、訳が分からない、理解出来ないと言ったところかな？ まあ、そりゃ、そうだ、これを一度聞いただけで理解出来たのならおじさん、びっくりしちゃうよ」

相変わらず、サツキは、気楽な口調。そんなサツキがさらに僕を混乱させているのかもしれない。

「何を根拠にそんな事を！」

やっと見つけた言葉がコレだ。

「根拠？ さっきの僕の蹴りを止めたのは、君自身の力さ。意識はしなくとも、神の力は、君を護った。常人が食らったら、ただでは済まなかったであろう蹴りから、オートで君を護った。さすが神様人璃様と言ったところかな」

そう言つと、サツキは、電球の光が余り届かない神社の奥へと、歩いて行く。

「まだ、信じられないか……まあ、仕方ないことかな」

サツキは、床に手を伸ばし、何かを取ったようだった、何かは、薄暗くて分からないが、細長く光っている。

「これならどうだい？」

あの時と同じだ、また消えたように見えた。でも分かっている移動したのだ、また僕の目の前に。

サツキが僕の近くに来てから気づいた、先ほどの細長く光っているモノは、日本刀だったという事に。そしてサツキは、刀を頭上に構え、僕を一刀両断しようとしている。

「えっ？ わああああああ」

振り下ろされる刀。普通なら、死ぬのであろう。でも——刀は、

キン！

金属音が、この本殿の中に響く。普通ならあり得ない。刀は、僕に着衣ギリギリまで来たが、服さえも斬れる事無く、刃先が折れ、サツキの後へと回転にしながら飛んでいき、床に刺さった。

そして、振り下ろした、状態だったサツキが、僕に顔を近づけて、
「ホラね、分かったろ。もう君は、人間じゃあないんだよう」

九神話 七日間

刀を振り下ろしたサツキ。刃先の折れた刀。無傷の僕。サツキの言葉——君は、もう人間じゃない——現実では、考えられない事が、目の前で起こっている。まるで、絵空事のような事。まるで夢のよう——

僕は、一筋の光希望と考え、ゆっくり右手を頬にやる。

「残念。夢じゃないよ『神様』」

痛かった。僕は、座ったまま俯いた。まるで、力が抜けて糸の切れた操り人形のように——認めたくない、現実が目の前、違う自分自身に在る。コイツの……サツキの話を信じるしかないのか……神を信じていなかった奴が神になる。全くおかしい話だ。人間という存在じゃない事が、こんなに悲しく、悔しい事だったとは——

「なんで……僕なんだ——」

僕から、数歩下がった、サツキが、

「誰でも良かった、神を信じていない者なら。その資格は在った、たまたま君がなってしまった、ただそれだけの事だよ」

「サツキ」

「ん？ なんだい、人璃君」

「僕が消えるってどういう事だ。これと、関係があるんだろう」
声に力は、もう無い。聞くのは、怖かったが、聞かずにはいられなかった。

「君は、『神様なんて居ないと信じる信仰』から生まれてしまった神だ。つまり、その人達は、神様なんて居ないと思っている、願っている、という事は、神様はその願いで消えるのさ。君は人々の想いで生まれ、人々の想いで消される。儚ことだね」

「何でアンタにそんな事が分かる」

怒りに似た感情と、憤り。

「僕は、そう言うモノを『専門』に扱う者だからね」

「サツキ、お前は、一体何者なんだ!？」

「時と場所、時代、土地、国によって、おじさんみたいな人は、色々な言われ方をするね、超能力者、魔女、魔法使い、陰陽師、超人、化物……まあ、一番分かりやすいのは、霊能力者つてのが、一番ポピュラーでこの場合は、相応しいだろう」

「霊能力者か、数時間前までは、存在を全否定していたが、今のなつては、肯定するしかなさそうだ。」

聞きたくは、無いが聞くしかない。

「僕は、いつ消えるんだ?」

震えた声だ、恐怖、絶望。

「おじさんは、そこまでは分からないけど、君は、分かる筈だよ、神様だからね、自分の消える時くらいは、思い浮かべれば分かる筈だ」

「……」

分かった、何故か。いいや、初めから知っていたかのように、海馬の中に大切にしまってあったモノを引き出したように。当たり前という感覚の違和感。

「七日後の午前零時……」

「そうかい、君は、その時消えるのかい。始まりには、終わりがある、それは、神様とて例外じゃない」

憐れんだ声。

「あと七日間、君は、人璃心軌として存在するのか、神様として存在するのか、君次第だ、それまで、御機嫌よう」

十神話 帰宅

僕は、神社を後にし、家へ帰った。

「あつ、心兄しんにいどこに行つてたの？」

妹が出迎える。無邪気な顔。やけにそれが辛かった。

「ああ、巫心みこちよつとな、母さんに飯は、食べて来たから、いらな
いって言つといてくれ」

食欲にんてモノは、無い。

そして、二階の自分の部屋へ行き、倒れるように、ベッドに横
になった。

頭が痛い。無理もないか、僕の頭でアレを全て理解するには、酷
だ。神様になったなら、もう少しIQがあと百位増えないもんかよ。

確か旧約聖書の創世記だと、神が七日間でこの世界を創つたんだ
っけ？ 今まで全く信じていなかったけど、もしかしたら、合つて
いるのかもな——それに比べて僕は、あと七日間で消えるのか——

自然と笑いがこぼれた。呆れるような、そんな感じに。

僕が消えたとしても、何も変わりはないだろうな、両親と妹の三
人家族になって——妹の方が、僕より、勉強も運動も出来るし——
学校には、友達も居ないし。

だから、選ばれたのかもしれない——

落ち着いて、考えると、余り恐怖が無い。これも神様なのだから、
もともと、そう言う人間だったからか、今の僕には分からない
いけど。

サツキは、「あと七日間、君は、人璃心軌として存在するのか、
神様として存在するのか、君次第だ」なんて、言っていたけど、自
分何が出来るかなんて分からないし、分かる事と言えば——あと七
日で消える事くらいか。

「無神論者が神になる。いい加減な世界だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0931z/>

元人間。元神。今？

2011年12月5日11時48分発行